

# サン＝テグジュペリにおける幸福

Le bonheur chez Saint-Exupéry

水 本 弘 文

キーワード：サン＝テグジュペリ、幸福、『城砦』、『人間の大地』

レジュメ：

サン＝テグジュペリの作品で幸福がどう扱われているのかを考察した。Ⅰの「幸福の位置」では、彼が幸福を人間活動の目標に置かない理由を幸福の個人性との関わりで推論し、Ⅱの「幸福の条件」では、彼にとっての幸福の条件としてよりよく生きるということが重視されていることを指摘し、Ⅲの「幸福の基底」では、よりよく生きるために生活を転換したあるスペイン人軍曹の生と死の挿話を取りあげ、生の充実がサン＝テグジュペリの幸福の基底を成していることを説明した。

始めに

Ⅰ 幸福の位置

Ⅱ 幸福の条件

Ⅲ 幸福の基底

終わりに

始めに

サン＝テグジュペリが幸福をどのように考えているのかを問題にしたい。

まず、幸福とは何なのかを簡単に整理しておきたい。辞書には「不自由や不満もなく、心が満ち足りていること。しあわせ。」(『ハイブリッド新辞林』)とある。生活条件や社会的な条件、あるいは身体的な条件、どれも幸福にとっては重要な要素かもしれないが、行き着くところは「心が満ち足りている」かどうかということであろう。

内心に強い不満を抱えていれば、たとえ客観的には恵まれた状況にあったとしても幸せとは言えないだろうし、逆に客観的な諸条件がどうであれ、本人がそれで満足していればその人は幸せということになる。幸福の舞台は個人の内面である。

また、どんなことで心が満たされるのかは必ずしもみんなが同じというわけではない。生活に困っている人にはわずかなお金や食べ物でも大きな喜びとなるかもしれないが、裕福な人には何ほどの感動も呼ばないだろう。社会的な栄達を喜びとする人もいれば、そういうことには関心のない人もいる。人によって生活状態や心の傾きは異なり、それに応じて求めるものも、満足の条件も違ってくる。何を幸福とするかは人それぞれであり、幸福の姿は多様なのである。

それでも、人は誰しもその人なりに幸せになることを願って生きている、と言うことはできるだろう。サン＝テグジュペリも例外ではないはずである。彼が求める幸福がどのようなものなのか、何ををもって彼の幸福とし、またそこへ至るどのような道を模索しているのか、以下考えていきたい。

## I 幸福の位置

「幸福」の観点からサン＝テグジュペリの作品を通観するとき、まず目につくのは、彼が幸福を目標視していないことである。「おまえに言っておく、人間はおのれの充実を求めているのであり、幸福を求めているのではない。」(『城砦』68章)

『城砦』のなかの族長が語るこの言葉に、幸福に対するサン＝テグジュペリの基本的な考え方がうかがえる。幸福になることを目標にして生きるのは間違いだ、ということである。この姿勢は初期の『南方郵便機』から遺稿『城砦』に至るまで変わることがない。

もちろん、だからといって幸福が無意味と否定されているわけではなく、たとえば『人間の大地』ではサン＝テグジュペリはかつての飛行士仲間に「幸福」を引き合いに出してこう呼びかけている。「僚友たちよ、ぼくの僚友たちよ、ぼくは君たちを証人に立てる、どんなときにぼくたちは幸福だと感じただろうか？」(『人間の大地』8章－3) サン＝テグジュペリが言いたいのは、彼らが幸福だったのは草創期の危険に満ちた郵便飛行業務のなかで苦闘していたときだったということである。平穏な日々や安楽によって成り立つような幸福は望めないにしても、そこには彼らなりの幸福な時間、幸福な体験、幸福な認識というのが確かに存在したのであり、サン＝テグジュペリはその事実とそこで得られた幸福感を証拠として、彼らの苦難の日々の正しさを主張しようとするのである。

ある人の生き方を振り返ってその意義を語る時、普通は、そこで何が為されたのかを判断材料とする。社会や人々にとってどのような意義あることが行われたのか、それが評価を決める

のである。判断する者が本人以外であったり、あるいは本人が自分の生き方を他の人々に納得させようとする場合には、こうした業績主義は分かりやすい。人々のためにこれこれのことが為された、人々のためにこれこれのことをした、の論議である。

しかしこれと並んで、生き方の判断材料にはもう一種類ある。本人がそれで幸せだったかどうかである。満足していたのか、納得していたのか、それとも不本意だったのか、こうした本人にとっての意味合いというのが、外からは分かりにくいにしても実際には存在するし、現実には人を動かしてもいる。誰もが自分の生き方については本人である。したがって社会的な判断、外からの視点と並んで、本人自身の受けとめ方、自身にとっての意義というのも無視できない大きな要素なのである。その生き方で幸せだったのか 実感という具体的な手応えで確認される幸福の有無には、ひとつの人生を説明するだけの重みがある。

ただ、そうした幸福ではあっても、サン＝テグジュペリの位置づけはやはり目標ではない。別な本来の目標を目指すなかで結果的に得られるもの、副次的な「報酬」として与えられるものであり、彼はそのことを彫刻とそれが持つ美しさにたとえて説明している。真の彫刻家は石材から美を引き出そうなどとは思わずに（すなわち目標とはせずに）内心にあって表現を求めているものに形を与えようと石を刻むのであり、できあがった作品がたとえ醜い容貌の人物像だったとしても、完成度が高くさえあれば見る者はそこに美を感じることになる。幸福についても事情は同じだということである。目標は別のところになければならない。

「おまえは思い出さないのか？幸福の条件は幸福そのものの探求ではないことを。もし幸福そのものの探求だとすれば、おまえはどこへ走るべきか分からずに、坐り込むことになるだろう。幸福は、お前が何かを創造したとき、報酬として与えられるのだ。幸福の条件は戦いであり、拘束であり、忍耐である。」（『城砦』152章）

幸福それ自体を目標にしてしまうと具体的に何をすればいいのか分からなくなる、これが族長の言うところだが、人類の幸福探求の長い歴史を振り返れば即座にそうだと頷ける言葉ではない。古代ギリシア哲学がエピクロス派にしるストア派にしる幸福を人生の目標に据えていたこと、そして幸福の条件が揺れ動かない心（アトラクシアあるいはアパティア）にあると考え、そうした心の錬成に向けてそれぞれ有効と思える方法や生き方を提唱し実践してきたのは周知のことである。また近世の「最大多数の最大幸福」で知られるベンサムの功利主義にしても、やはり善悪の基準と人間活動の目標に幸福を置き、幸福の客観的な条件として社会制度や生活条件の向上、つまりは快適さの追求に人々の努力を向けさせることになった。「快さ」を幸福の内実とするこの思想は現代にまで影響が及ぶ大きな流れである。人間が幸福追求を目標とし、

そのための手だてをあれこれ講じてきた歴史は存在するのである。

とはいえどの方法も、人間を幸福にする上でそれなりの有効性を発揮しながらも、オールマイティではなかった。みんなを完全に幸せにする幸福の条件は発見されていないし、今後も発見されることはないだろう。もしそういうことがあるとすれば、それは人間がロボットのように均一化されたときである。なぜなら冒頭で述べたように、人間はそれぞれ微妙に異なった性格、異なる考えを持って生きており、したがって幸せも人それぞれ、幸せを感じる条件も人それぞれという事実があるからである。たしかに、生きていくのに必要な最低限の生活条件などは、全ての人に共通な幸福の条件の一つと考えることはできる。生きていなければ幸福も不幸もないのだから。他にも仕事のこととか、友人や伴侶のこと、能力や健康状態など、幾らでも幸福の条件となりそうな事柄は挙げることができるが、それでも、そうした条件を満たしさえすれば済むというわけでもない。客観的には恵まれた状態にありながらも幸福を実感できない人、不幸に沈む人がいることから分かるように、外から見えるところだけではその人が幸せなのかどうかは判別できない。幸福は究極のところでは本人が自分でそう思えるかどうかなのであり、その意味で極めて主観的、個人的な問題なのである。

ここにおいて、サン＝テグジュペリが幸福を目標視しない理由が少し見えてくる。幸福を目標として追求するというのは、先に生き方を判断する二つの基準として挙げた、社会的な意義と本人にとっての意義、この二つのうちの一つだけ、本人にとっての意義のみを生きることになるからである。社会のなかで他の人々と一緒に生きているわれわれである、これら二つの基準はもともと二者択一で考えられることではない。バランス配分は各人各様だとしても、両者への相応の配慮があることによって社会で生きる人間の暮らしが成り立っている。それが、個人性を本質とする幸福を目標にした場合には、秤の針が極端に個人の側に振れ過ぎることになる。幸福を徹底して追求すればするほど、自分の幸せが何よりも大事という個人主義や、あらゆる物事を自分の幸せのために利用するという利己主義に傾斜して行かざるを得なくなる。実際、幸福を目標としたストア派は自己執着を極限にまで肥大させた結果、遂には内心の自足・平安を他からの干渉や刺激で乱されないためとして自殺を是認するまでになったし、功利主義の幸福追求にしても、個人が他の人々や共同体を自分の幸福のために手段視する傾向を助長する側面があるのは否定できない。

サン＝テグジュペリはそうした自己目的的な生き方は人間のなかの利己的な性情に応じたものではあっても、結局は自分という狭い世界に人を閉じ込めることになると考え、それを招くことになる幸福の目標化を肯定できないのである。人間というのは自分のためだけの自分、自分のためだけの人生に真に満足できるような存在ではない、という認識がその根底にある。

## II 幸福の条件

幸福になるにはどうしたらいいのか、何が必要なのか こうした質問に対する『城砦』の族長そしてサン＝テグジュペリの回答は、前章で見た通り逆説的なものだった。幸福を求めないことが幸福へ至る道だ、ということである。それでは幸福に代えて何を求めたらいいのか、この問いに対しては「おのれの充実」という答えが示されていた。「充実」を目指す過程で結果的に得られるのがサン＝テグジュペリの幸福、少なくとも彼が評価する幸福だということである。というのも、サン＝テグジュペリが評価しない幸福というものもあるからである。

たとえば快樂追求を人生の目標とする享樂主義者の幸福がそうであるし、また安逸や閉塞を印象づけるような幸福にも警戒の眼が向けられる。これらがマイナスのイメージで語られる原因、それは別に心の安らぎとか精神的・官能的な喜びなど幸福感と直接結びつく諸要素にあるのではない（それらはサン＝テグジュペリが肯定する幸福にもある程度は内容として見出される）。その幸福がその人の人生においてどのように位置づけられているのか、そしてその人をどんな生き方に導くことになるのか、その点の判断からである。あくまで、生き方との関わりにおいての評価である。

ではサン＝テグジュペリが評価する幸福はどのような生き方と結びついているのか、それを示唆する挿話が『人間の大地』の８章に見られる。僚友メルモーズの挿話である。

作者は飛行士仲間のメルモーズや他の友人数人とうんざりするまで飲んだり、しゃべったりして過ごしたパリでの一夜を回想する。疲れ切って夜明けにバーを出たところで、メルモーズが作者の腕を強くつかんで言うのである、「なあ君、いま時分、ダカールでは・・・」（『人間の大地』８章－２）。作者とメルモーズが留守にしているセネガルのダカール基地では、その日の業務に向けて整備士や他の飛行士たちが活動を始めている時刻である。メルモーズの次の言葉がこのときの二人の気持を集約している 「ここはなんて醜悪なんだ・・・」（『人間の大地』８章－２）。

ダカールへのこの郷愁めいた愛着は、パリとダカールの都市比較から出てくるのではない。比較の対象になっているのは彼ら自身である。都会で交友や飲食を楽しんでいる自分と、規律と危険を引き受けて郵便機を操縦している自分とを対比し、後者にこそ本来の自分の姿があるという確認があるのである。享樂と怠惰に沈んだ自分への嫌悪、そんな自分にしてしまう蠱惑的なパリへの不信、それが「ここはなんて醜悪なんだ・・・」なのである。

人間は放っておいても享樂の生活には惹かれていく。楽しいこと、楽なこと、心地よいこと、こういった快樂を求めるのは恐らく人間の本性であり、自然なことである。幸福とはこの世にある快樂をできるだけ多く味わうことだ、と考える人がいてもおかしくはない。それなのにな

ゼメルモーズは、そういう生活に背を向け、わざわざ苦難と危険が待つダカールへ戻ることを願うのか。サン＝テグジュペリにしても同じである。

人間のなかにはそうした生き方を促すもうひとつの本性が潜んでいるのだ、というのがサン＝テグジュペリの結論である。穏やかな暮らしや安楽の日々を捨て、自ら苦難のなかに身を投じる者、その苦難のなかで満足の笑みを浮かべ、生命を危険にさらすことになる任務にさえ淡々と出発する者たちがいるのをサン＝テグジュペリは見てきたのである。彼らには自分自身と自分の生き方に対する深い肯定感があり、たとえば航空基地などの見かけはみすばらしかったり劣悪だったりする環境さえも、そこが自分を本来の自分にし、好きな自分にする場所だという理由で、他人には分からないある輝きを放って見えるのである。

サン＝テグジュペリやメルモーズや他の僚友たちにこうした生き方を選ばせる力、人間のもうひとつの本性というのは何なのか。これについてサン＝テグジュペリは、たとえば「おのれの充実」や「自己完成」を求める気持とか、「真の人間」に成ろうとする気持、などとその時々で言葉で語るのだが、それらに共通する人間の心の傾きを要約するなら、よりよい人間でありたいという思いであり、さらには、よりよく生きたいという思いであろう。

生きるために生きるというのもそれはそれで大変なことだし、生命はまず生存本能という形でそのことを求めている。感覚や官能の喜びを求めて生きるというのも、好奇心いっぱい新しい体験に貪欲な人間ならではの魅力ある生き方には違いないが、それでもそればかりでは飽きる、快楽に倦むというのも人間にはある。もし絶えず新しい刺激を求めてあちらこちらと走りまわり、ありとあらゆる欲望の充足を図るとするなら、それは結局自分のなかの欲望に振り回される人生ということであり、人間は恐らくそこまでの快楽追求は望んでいない。単なる生命としてだけではなく精神を持った存在として生きる人間には、生命や感覚の要請に従っていわば他律的に生きるだけではなく、自分が本当に納得できる生き方をしたい、よりよく生きたい、という思いがあるのである。

サン＝テグジュペリの幸福はそのよりよい生き方を母体として生まれるのであり、さらには、そうした生き方を生きること自体が幸福ともなるのである。よりよく生きようと努めること、これがサン＝テグジュペリの考える幸福の条件である。

### Ⅲ 幸福の基底

よりよく生きるにはどうしたらいいのか、よりよい生き方というのはどのようなものなのか。幸福の条件がそこにあるのであれば、この点をはっきりさせる必要がある。先のメルモーズの



挿話の前後で語られているスペイン人軍曹の挿話にそのヒントを探してみよう。よりよく生きたいと思って、それを実行した男の話である。

スペイン内戦(1936-39)の際にレポーターとしてスペインに赴いたサン＝テグジュペリは、政府軍塹壕のなかでひとりの軍曹を知る。絶望的な突撃命令を受けた部隊に所属するその軍曹は、出撃までの間仮眠を取っていたのだが、時間が来て仲間の兵士に起こされる。夢うつつの彼は最初のうち平和で幸せな眠りのなかへ戻ろうとするのだが、当然叶うことなく、やがて起きあがって仲間に出撃の時間になったのかと尋ねる。サン＝テグジュペリはそのとき、彼がにっこりしているのに気づくのである。この目覚めというのは、それに続く出撃によって、ほぼ確実に軍曹に死をもたらすものである。彼もそれは承知している。間近に自らの死が迫っている者が見せるほほえみ、サン＝テグジュペリはそれに強く心を揺さぶられる。なぜ軍曹は笑えるのか。

君は以前、パルセロナのあるところで、しがない会計係として数字をならべていたのだ、君の国の大きな分裂など気にすることもなく。しかし一人の仲間が軍に志願した。次いで二番目の仲間が、そして三番目の仲間が。すると君は驚きの中で奇妙な変化を感じた。日々の仕事が少しずつ下らなく思えてきたのだ。君の喜び、君の心労、君のささやかな安楽、それらがみんな昔のことのよう思えてきた。そこまではまだよかった。しかし、ついに死亡報告が、仲間の一人がマラガの近くで殺されたという報せがやってきた。彼は君が復讐をしてやりたいと思うような友人ではなかった。政治については、これまで一度だって君の心をかき乱したことはなかった。それでもこの報せは君たちの上を、君たちの狭い運命の上を一陣の風のように吹き抜けたのだ。その朝、一人の仲間が君を見つめて言った、

「行くかい？」

「行こう」

そして君たちは《行った》のだ。(『人間の大地』8章-2)

平凡な会計係が、死を前にして笑顔を見せる軍曹に変わったのである。一体何が起きたのか、上記引用文から推測してみよう。

この会計係は多分出征する前はそれと意識しないまま、いわば生きるために生き、あるいは日々のささやかな喜びのために生きていたのだろう。自分のためだけに生きていたとも言える。それはそれで幸せな生活だったのかもしれないが、しかし、同じそういう生活を執着もなく捨て、志願兵となって出て行く同僚が次々に現れると、動揺が始まる。そして同僚の一人の戦死が、それまでの自分の生活への信頼を決定的に覆すことになる。このとき会計係のなかに生ま

れたのは、恐らく、驚きと羨望である。死んだ同僚には生命を犠牲にするまでの何かがあったということ、それを実際に同僚が死んだことで実感させられ、そういう世界があることに驚くと同時にうらやましく思ったのである。そして、彼自身にはそこまで大事なものが何もないことに気づき、そうした自分と自分の生活に物足りなさを覚え、何か大事なもののために生きたり死んだりすることを求めて戦場へ向かった。そういうことではないだろうか。

もちろん、内戦という大きな歴史的イベントに関わることで、無意識のうちに自分の生と死に個人的な枠を超えた意味を与えようとしたということもあるかもしれない。サン＝テグジュペリの語り口にはそういう印象を与えるところもある。ただ、もしそれだけであれば、彼が人を殺したり自分も殺されたりするというのが、参加した戦争の中での一つの駒としての役割においてだけということになる。野次馬がお祭り騒ぎに興奮して御輿を担ぐ仲間に加わるのと大差ない。それでは御輿が倒れて押しつぶされたとき、笑って死ぬことはできないだろう。もし笑うとしたら、自嘲の笑いである。死を甘受させるに足る何かがなければ、命と引き換えにしても惜しくないと思えるだけの何か貴重なものが本人に意識されていなければ、死を前にして素直に笑顔になることなどできないだろう。

先の引用文は出発までのいきさつを語るだけだが、他の箇所を加味して入隊後の彼についても考えてみる。政治に関心のない彼である、命を賭けるのは党派的な主義主張ではないだろう。その代りとして考えられるのは、戦いに勝利するという共通の目的で結ばれた仲間たち、生死を共にする部隊の仲間たちへの友愛であろうか。仲間と共に戦い、共に死ぬことが何よりも大事なこととなる。現にサン＝テグジュペリは、部隊の仲間の一人が眠りから目ざめようとしないうちにこの軍曹の首の後ろに腕をまわし、「おい相棒！」と声をかけ、ほほえみながら頭を持ち上げる姿を見てこう書いている 「ぼくは、ぼくの人生で、これほど愛情のこもったものは見たことがなかった」(『人間の大地』8章－2)

軍曹の挿話は戦場という特別な状況下での出来事を語っているのだが、日常のわれわれにもよりよく生きることを考える上で参考になることを伝えている。自分のためだけに生きるよりは、自分と強く結びついた何か大事なもののために生きる方が、かえって自分の人生に充実と重みを加えることになる、という逆説的な事実である。別な言い方をすれば、自分一人の自分から、外にある大事な何かと結びついた自分に変わり、自分という存在に広がりを与えること、これがよりよく生きることにつながるということである。軍曹のほほえみは、自分の運命をその死で完成させようとする者の笑み、芸術家が完成間近な作品を前に思わず洩らす笑みのようなものだったのかもしれない。第三者の目には悲劇的と見えても、軍曹本人にとっては自らが選んだ生き方を全うするだけのことで、彼はそれで納得しているのである。幸福かどうかで言うなら、このときの軍曹は幸福なのだろう。自らの死さえも甘受できる生き方を見つけ、



それを生きることができたのだから。

何と結びつくべきなのか、何と結びつけばよりよい生き方になるのか、これについてサン＝テグジュペリは特に明言も、限定もしない。しかし彼がよく用いる結果からの遡行という論法、つまり、ある木に適した土壌はその木が大きく育った時にそれと分かる、にならって次のように言うことはできるだろう。ある結びつきのなかで生きたときに自らの生がより充実するのが感じられれば、その結びつきがその人のための結びつきであり、その相手が大事な何かだということである。

自分が納得できる生き方をすること、よりよく生きることが幸福にとって大きな意味を持つ理由がここにある。「充実」である。他との結びつきによって自分の存在と行動に新たに大きな意味が生まれる、それもたしかに大事だが、しかしそれが大事になるのは、その意味づけに納得して活気づく自分の心と体と精神があるからである。納得できる生き方をすることは人生に密度や強度や熱気が増すことであり、この充実感が基底にあって、よりよい生き方があるのである。

たとえば、あのスペイン人軍曹の生と死を意義あるものにするはずだった政府軍が戦いに敗れたとき、そして政府自体が消え去ったとき（スペイン市民戦争はフランコ軍が勝利し人民政府は消滅した）軍曹は無駄死にしたことになるのか、戦場での苦労は意味を失い、彼は人生の失敗者になるのかということ、そうでもない。簡単に言うなら、頑張ったという事実があるからである。頑張ったということは彼がその時を十分に生きたということ、生命を燃焼させたということであり、このことは戦いの勝敗とは関係なく、彼を充実の時空を生きた幸福な人間にするのである。

人間の生のこうした微妙さは、たとえば野球の全国大会で甲子園へ行ける可能性がほとんどなくても、暗くなるまで練習に励む高校球児を考えると、よく分かる。一見すると、甲子園への夢が彼らの苦労に意味を与え、支えているように見える。それは間違いではないが全てでもない。体と頭を精一杯働かせ、うまくなろうと工夫し努力すること、そうしたこと自体にも生命の喜びはあるのである。一生懸命になるためには「甲子園」が必要かもしれないが、しかし大会予選で敗退しても、彼らが苦しい練習をしていたその時間は、その濃密さによってすでに報われているとも言えるだろう。成績や結果でしか判断しないとすれば、彼らは貴重な時間を無駄にしたことになるが、生の充実、幸福の観点からすれば、彼らは大会予選以前にすでに勝者だったのである。

「幸福」よりも「充実」だ、とサン＝テグジュペリは二つを区別して語っていたが、実のところは両者は深く結びついていて、充実を基底とした幸福が「サン＝テグジュペリの幸福」なのである。

## 終わりに

生を濃密に生きることを願って人間はよりよい生き方を求め、人生に意味を求めるが、それは必ずしも兵士や飛行士といった激的な生活背景を必要とするわけではない。『ある人質への手紙』に描かれた河畔のレストランでのひときは、これといって変わったことがあるでもない日常のひとこまが、生きていることの幸せを感じさせるものになり得ることを教えている。サン＝テグジュペリと友人のレオン・ウェルトはそこで食事をし、酒を飲み、川船の船員を呼んで酒をおごり、ともに語らうのである。ウエイトレスは笑顔で給仕し、太陽は輝き、川面はきらきら光り、風景は穏やかに彼方へ延び広がっている。サン＝テグジュペリが貴重な宝物を箱から取り出すようにして語るこの情景は、様々なピースが寄り集まって一枚の絵になっているというよりは、全てが融け合って一体となったような、独特の安らぎに満ちている。感覚も官能も精神もみんな嬉しがっているような河畔のこの幸せなひとときも、「サン＝テグジュペリの幸福」のひとつの姿なのである。

## 注

使用テキスト：Saint-Exupéry; *Œuvres complètes* (La Pléiade, 1994)

引用文の作品名と章表示は本文中に記した。